

明治大正誌農器具篇：犁の近代化をめぐる農村誌に むけて

牛島, 史彦
九州女子大学文学部

<https://doi.org/10.15017/2244537>

出版情報：九州人類学会報. 23, pp.16-17, 1995-12-01. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



明治大正誌農器具篇 ―犁の近代化をめぐる農村誌にむけて―

九州女子大学文学部 牛 島 史 彦

1) 犁と「神話」

明治24年、いわゆるお雇い外人のM. フェスカが『日本地産論 特編』のなかで最良の評価を寄せた在来農具が「抱持立犁」だった。該当部分を直訳すると「筑前・筑後地方の福岡県で最良の和犁に出会った。図. 1は私が描いたこの“だきもちたてすき”という名で呼ばれる犁である」となる。前後の大意は「日本には見るべき農器具も農法も無いが、筑前の抱持立犁は其中では最良のもので、これは他の犁や鋤よりは一番深く耕せる」という極くおおまかな所見である。

水田での稲作技術に関して殆ど無知であったフェスカに、技術指導を期待するという方針自体に誤りがあったのだが、衆知のように当時のいわゆるお雇いの外人の権威は絶対であった。しかも当たりはずれの多かった外人教師や技師のなかでは最もよく期待に応えた人物であり、特に自ら全国を廻って土壌分布図を完成するという業績から、医学のベルツと並んで最も高い評価と信頼を得ていたのである。こういった背景から、農商務省としては専門分野での最高指導者が日本の犁のなかでは深く耕せるので一番優れていると判定した抱持立犁と、これをひとつの構成要素とする九州北部地方の稲作の技術体系を全国に普及させるという判断を下したのである。

しかし、この抱持立犁は朝鮮半島や北部九州における分布や形態から基本的には畑作用の犁だったとも思われ、水稲用の犁として必ずしも万能というものではなかった。当局および研究分野の関係者がその普及にあたって犯した誤認の背景には、西日本を中心に広く使われている長床犁は接地面が広いので抵抗も大きいという思い込みがあった。しかし摩擦抵抗はその物の重量に比例するものであって、接地面が広いことは摩擦抵抗には関係しない。そして、より大型の長床犁が数キロばかり重たいとはいっても、それによる抵抗の増大は確認し得たデータによると抱持立犁が5.8キロに対して10.84キロと5キロの差でしかない。

このときの長床犁は重量が20キロというかなり大型のもので、実験で得られた摩擦抵抗の格差はほぼ最大の場合と考えてよいと思われるが、犁が地面を耕す時に牛馬にかかる負荷は全体で30キロから最大90キロ以上におよぶことが九州帝国大学農学部に於ける実験でも報告されており、仮に5キロの差があるとしても長床犁のほうが安定性があるって作業中の負荷の増減が少ないことを考えると、人にとっても牛馬にとっても疲労が少ないのは長床犁であることは論を待たない。

フェスカが評価したのは耕起具としての犁であるが、同地方の農業は換金作物を裏作のなかに取り入れた西日本の集約農業の地域的展開形態であり、そのような体系的な長所と畝立て耕を効率的に行う抱持立犁の単品としての特質とを、指導者たちが実証性を欠いたまま混同した点に近代農政の根本的問題があったと思われる。このような過程は、広義の神話的生成の問題と関連するのもかも知れないが、次にこの犁を担いで全国を駆けめぐり「馬耕名人」と敬われた「英雄」たちの話に移りたい。

2) 犁と「名人」

旧、粕屋郡から朝倉郡にかけて八十歳代後半の古老を尋ね廻って犁の呼称を聞いてみると、「抱持立犁」は実際にはカカエズキと呼ばれていたことが分かる。そして明治後期から大正期以降の改良型が普及すると、カカエズキは田から逐われて畑の作条用に零落したことが、彼等の子どもの頃の農作業の思い出として残っている。いっぽう「クレ拾い」という言葉が、これは実際の作業に参加した経験ではなく幼少時に眺めていた農作業の風景として記憶されているのだが、カカエズキでは反転された土クレ（土塊）が大きく、これを一個づつ拾って鍬で砕いておかねばならなかったという。

彼らが犁耕を初めて習得した大正初期の頃には、鉄の犁床と鋼板製の曲面のへらを備え土の反転とクレの粉碎に有利な犁が登場したのだが、こうして「クレ拾い」の手間が解消される以前の時期を、彼等は「モッタテ時代」とも呼んでいる。具体的な聞き書きの場に突出したこの時代区分の発想は、農学の知識がムラへ還流したものといえるのかも知れない。そして昭和以降、我が国の犁の分析や研究をリードした九州帝国大学農学部は、同じ粕屋郡にあって近隣の農家や農器具商と密接に交流していた点からみて、その源郷のひとつであった可能性がある。

その講座の初代教授、森周六博士はこのような地元の人々の作業場に通いつめてデータを収集し研究成果を還元していったというが、極めて具体的な形での「産学協同」体制の至近距離で犁を駆使していた彼等にとって、それはもはや民間伝承の「民具」ではなくなりつつあったと考えてよいだろう。さらに青年時代の彼等を襲った農村恐慌は、犁を駆使する「百姓仕事」を、極端な高給が約束された「馬耕名人」として世に出るための特殊技能へと変質させるのである。牛馬耕の本場に育った彼等は、犁の操作を小学校を終える頃から一種の精神修養として青年団の先輩たちに叩かれながら厳しく仕込まれ、村や郡ごとに耕耘技術を競う競犁会（キョーリカイ、ケイリカイ）の成績で「男」としての名声が測られた。

例えば福岡市南郊農村の平均的な自作農の跡取りであったT氏の場合、昭和8年の粕屋郡競犁会で若干17歳で優勝して大評判となり、激しいスカウト戦を経て改良型の製造で名を馳せた博多・土居町の磯野七平製作所に入社する。昭和9年の米価は一俵10円80銭だったが、T氏には年間半分近くは各地の農会などから巡回指導の要請があり、国内は勿論台湾韓国まで出張して一日5円などという日当を受け取っている。控えめに三分の一が地方出張として、月給と合計すると単純計算で年収1200円であった。

在来の百姓仕事が、この様な破格の現金収入を約束する特殊技能となり、もたらされる収入が一層「男」の側へと限定されていった時代。あるいはその労働が給与や賃金として評価される「男」となることが、ムラの青少年の目標であった時代。そして婦人が単なる「作業補助員」或いは「男」の留守を預かる「主婦」として、労働換金の制度から一層除外されていったであろう時代。社会状況と関連して労働の評価と性差が変質拡大してゆくこの様な過程は、現代において尚も未解決の社会問題を視野に入れた場合、すぐれて今日的な研究課題であろう。

先述の「神話」「英雄」ということばを使うだけでは論外だが、「常民」の百姓仕事が国の政策のもとで年収千円の教授収入となってしまう急激な現象は、近代国家における「神話」の成立 流布の問題だろう。なかでも「モッタテ時代」といった公用語の環流や民俗語彙の混乱は、ことばの近代的変質として労働や性差の局面とあわせて、そのような枠組みによる農村誌の目安になると考える。